

「ベトナムの道教信仰と正月行事」要旨

道教は、儀式・護符・薬の服用により、不老長寿など現世での超人^{しんせん}神仙を目指す中国の宗教。その宗教職能者を道士^{どうし}、宗教施設を道観^{どうかん}という。

ベトナムには、2世紀以降に中国の避難民が神仙思想を伝え、4・5世紀に中国の武将が初期教団道教の天師道^{てんしどう}を広めた。また不老長寿薬の原料とされた金・朱砂^{しゅしゃ}（硫化水銀：HgS）・シナモン（肉桂）などをベトナムに求めた中国人道士も道教を伝えた。

天師道の主神の三官^{さんかん}から天^{ティエン}・地^{ディア}・水^{トゥイー}の三府^{タームフー}の神々が生まれ、後に岳府^{ニャクフー}を加えた四府^{トゥーフー}の女神^{タインマウ}聖母への信仰に発展した。さらに17世紀の内乱の中で、中国道教の女神で軍神^{きゅうてんげん}の九天玄女への信仰が発展した。

現在、ベトナムで最も重要な年中行事であるテト（旧正月）の始まりのかまど神の送迎、大晦日に行う竹竿カイーネウの飾りや年神の送迎、締めくくりの星祭に、道教の強い影響が見られる。